

Sengokuyama Journal  
of Buddhist Studies  
Vol. IV, 2008

仙石山論集 第4号 (平成20年)

『見性成佛論』の基本的性格に関する一考察

古  
瀬  
珠  
水

## 『見性成佛論』の基本的性格に関する一考察

古瀬 珠水

はじめに

大日房能忍によって開宗されたとする「達磨宗」に関しては、既に多くの研究者らによりその存在が指摘され、その実態も少しずつ解明されつつある。最近では、名古屋市真福寺所蔵の文書資料の中に「大日本国特賜金剛阿闍梨能忍」と記された資料が存在することの発表がなされた。<sup>①</sup>

先行研究として、鷲尾順敬氏が平安時代末期から鎌倉時代初期、栄西と同時期に大日房能忍という人物が達磨宗を開宗したことを発表して以来、達磨宗徒と道元禪師・曹洞宗との関係について大久保道舟氏<sup>②</sup>、嗣永芳照氏<sup>③</sup>が論じ、高橋秀栄氏は「大日房能忍と達磨宗の関係資料」を発表された。また、「正法寺資料」に関し高橋秀栄氏<sup>④</sup>、中尾良信氏が詳細な研究をされた。さらにそれらに先んじて、石井修道氏は『金沢文庫資料全書 仏典第一巻禅籍篇』<sup>⑤</sup>に収められている『成等正覺論』の訓読および思想的研究を手がけ、達磨宗の文献として紹介された。

しかし『成等正覺論』と同じように『金沢文庫資料全書 仏典第一巻禅籍篇』に収められている『見性成佛論』については、達磨宗関係の資料と夙に言われているものの、詳しい研究は未だされていないようである。昨年筆者は、修士論文として『見性成佛論』の訳注研究を試みた。その結果、『見性成佛論』は大日房能忍関係の文書としての可能性が高いことが判明し、今まで発表されていない思想内容などを明らかにした。

本論考では『見性成佛論』の基本的性格を「引用文」及び「禪宗以外の仏教に対する批判」の視点から考察する。結論では、『見性成佛論』の思想の一面が解ったことで、『見性成佛論』が大日房能忍に關わる論書である可能性が高いことを指摘した。その結果、大日房能忍像が今までより鮮明に浮かび上がらせることと成るであろう。また、『見性成佛論』の成立年代について筆者の考えを提示するであろう。

なお、本論考は『見性成佛論』は金沢文庫より入手した原本の電子コピー及び『金沢文庫資料全書 仏典第一卷 禪籍篇』<sup>⑨</sup>に収められている『見性成佛論』翻刻に依った。本論中『見性成佛論』の引用は同、『見性成佛論』翻刻からとし、ページ番号は同資料の通し番号を示す。翻刻文には読みやすいように「句点」、「読点」を仮に筆者が施した。また、特に原文がカタカナ交じりで読み取りにくい場合は、原文の後に筆者が漢字と平仮名で理解しやすい形に書き直した。その際、漢字は、原文に忠実なることを心がけたが、古体・略字・異体字などは通用の字体に改めたところもある。原文に補ったほうが良いと思える文字は（ ）内で示した。また、原文の誤りと思える文字は〔 〕内で示した。なお、引用文は《 》で括った。

### 一、引用文からみる思想傾向

『見性成佛論』の主題は表題どおり見性成仏（性を見、仏と成る）である。さとりとは何か、どうすればさとりを得られることができるかについて説いている。「序」では禪師たちの頓悟の瞬間を列挙し、禪宗におけるさとのりのあり方を示し、それに続き「本文の問答」へと展開していく。

さて、従来の達磨宗の思想と結びつきがあると言われている禅関係の書物は『達磨大師三論』（『血脈論』、『悟性論』、『破相論』、『宗鏡録』、『伝心法要』、『景德伝燈録』）などがある。特に『宗鏡録』が『成等正覺論』の中核を成していることは石井氏の研究で証明された。<sup>⑩</sup>また、達磨宗が『宗鏡録』の影響を多く受けた教禅一致の思

想であるとも考えられてきたようである。ところが『見性成佛論』では必ずしも『宗鏡録』の思想にのみ影響を受けているわけではない。むしろ、多くの禪語録を引用し、禪宗（『見性成佛論』では「心宗」または「佛心宗」と言う）の思想を明らかにしようとしている。

先ず、『見性成佛論』の形態を明らかにしてみよう。『見性成佛論』は「序」と問答形式の「本文」に分かれている。序では禪師達の頓悟の瞬間を綿々と記述し、最後に『見性成佛論』の思想を包括するような文章で以下のように結んでいる。

「羨ネカクハ□華開ハクケ萬葉ハクニ早結ハヤムススレ佛果ツツ心地ニ免マモケレテ心裏ココロサウノ枯燥ソノ之ノ識シ捨コト意コト地ノ洪波ヒツナ之ノ謂イフ。呵カナシキ 呵カサヤク 唎マシキ 唎カサヤク」（二七五頁下）

問答形式の本文は判読不能な箇所や中欠もあるが、判読可能な部分から数えて、合計四十四から成る口語的な問答である。問者、ないし問者と想定される人物は天台学僧と思われ、学僧の立場からさまざまな質問を投げかけるが、答者は禪の立場から質問に答えていく。質問に対する答えが一から十二までが引用・喩えなどを入り混ぜ詳細で丁寧な回答であるが、終盤の十三から四十四までは短かくストレートな質問、及び簡潔で後代に定型化した「禪問答」のような回答で締め括られていく。言うなれば、『見性成佛論』は形式に嵌ることなく表現の仕方も自由であり、鋭い批判も語られ、何ものにも捉われず自論を展開していく。本文の最後に「酉時了 永仁五年八月四日」（一二九七年八月四日午後六時ごろ終了）とあるが、これは、この問答集が成立してから半世紀余り後に書写されたものと筆者は考えている。その理由は結論で述べるであろう。

『宗鏡録』からの引用は、筆者が数えるところ六箇所であるが、本文に「宗鏡ノ録ニハ」、「宗鏡ニ云ク」と明確に示している箇所は四箇所である。残りの二箇所は本文に記述は無いが『宗鏡録』からの引用文であると考えられる。また、論書の表題が示してあるのは『悟性論』（本資料では「語性論」と表記）<sup>14</sup>がある。上記以外の引

用は、禪者達の禪語録である。ほとんどが『景德伝燈録』が出典かと思われるが、所々表現（大正蔵『景德伝燈録』と照らし合わせた結果）が異なっている事もあり、当時は別に流行したであろう禪語録類に基づいていることも考えられる。<sup>15</sup> 因みに『景德伝燈録』からの引用は、筆者の数えるところ四十二箇所になる。人名及びその人名が付された語録、それ以外の本文に人名や語録名が示されていないが、それとわかるものを含む引用の回数は、大珠慧海（慧海和尚）が五回、宝誌が四回、永嘉玄覺（真覺大師）の『証道歌』から三回、牛頭系の龍牙居遁、南陽慧忠（忠国師）、雲居和尚とされるもの、馬祖道一、荷沢神会、三祖僧燦『信心銘』、四祖道信、傅大士、宗密、それに弘法大師（？）<sup>27</sup> がそれぞれ一回ずつである。（但し、語録に関しては典拠が複数確認できることもある。）

引用された人名から判明することは、馬祖道一他、道一の法嗣・大珠慧海から五回も引用していることや荷沢神会からも引用があることから、唐代南宗禪の洪州宗馬祖系の思想に影響を受けていることである。また、牛頭宗の禪にも傾倒していることが解る。従来言われている『達磨二論』については、『悟性論』から一箇所あるが、他の二論から直接引用されている箇所は確認できない。

## 二、禪宗以外の仏教に対する批判

『見性成佛論』が成立した時代に即してみれば、まだ、「宗派」の枠組みを用いて議論することは正しくないかもしれない。ここでは『見性成佛論』で表現されている呼び方で表わす。批判の対象になっているのは、三蔵教（小乗宗）、円教、律師、念仏である。

先ず、三蔵教（小乗宗）については、過去・現在・未来、修行に明け暮れて功德積み重ねてやっと仏に成れる、

と冷ややかに説明している。就いては次の如くである。

「三藏教<sup>ニハ</sup>三祇<sup>ニ</sup>六度<sup>ヲ</sup>行脩<sup>シ</sup>百劫<sup>ニ</sup>四八業<sup>ヲ</sup>ウへ、自行化他<sup>ノ</sup>功德<sup>ヲ</sup>圓滿<sup>スル</sup>トキ、菩提樹<sup>下</sup><sup>ニ</sup>三十四心<sup>ニ</sup>斷結<sup>ニ</sup>成道<sup>スル</sup>佛ナルトハイウナリ。」  
(一八一頁上)

第二の批判は、おそらく天台宗を指すと思われる「円教」である。円教については、最も長く詳しい説明をしている。以下、主な文を抜粋して示す。

「円教<sup>ニハ</sup>六即<sup>ノ</sup>次位<sup>ヲ</sup>タテ、六輪<sup>ノ</sup>斷惑<sup>ヲ</sup>判。ソレ薄地衆生理。即、凡夫知識シタカイ、經卷シタカイテ法<sup>ナリト</sup>キ、文ナラウニ一切法ミナコレ佛法サトルナリ……六凡四聖不二<sup>ニ</sup>九權一實無<sup>ニ</sup>「カクノコトク、善惡不二<sup>ニ</sup>邪正一如<sup>ト</sup>、クヲキ、テ、ソノコトハリヲサトリ、アラハサムト、教信、理仰、名字ノウヘニツイテシルヲ、於名字中通達解了知、一切法皆是佛法、釋<sup>スル</sup>ナリ。コレ能詮<sup>イフセシヨク</sup>言教<sup>ノ</sup>ウヘノサトリナリ。故、ムニノ木ハヘニタマ<sup>ノ</sup>字ニテアラハレタリトハイヘトモ、ソノ是字非字シラサルカコトシ。コレモマタ<sup>ノ</sup>シカナリ……ソモ<sup>ノ</sup>、ヘタテモナク、コトナラサリケル佛性眞如、イカムカサトリシルヘキトイウニ、觀行相似クライヲヘテ、ウチニ八十法成乘觀智<sup>ヲ</sup>コラシテ、ホカニ八万行諸波羅蜜<sup>ヲ</sup>修行ナ<sup>リ</sup>「經典讀誦<sup>ヲ</sup>、佛法解説<sup>ス</sup>。」(一八一頁上〜一八二頁上)

(円教には六即の次位を立てて、六輪斷惑を判(ず)。それ薄地衆生理。即ち、凡夫、知識(に)従い、經卷従いて法なりと聞き、文習うに一切法皆是佛法(と)さとのなり。……、六凡四聖不二にして九權一實無<sup>ニ</sup>「是の如く、善惡不二邪正一如なり」と説くを聞きて、その理をさとり、あらわさむと教を信(じ)、理を仰ぎて名字の上において知るを、《於名字中通達解了知、一切法皆是佛法》(と)釋するなり。これ能詮言教(の)上のさとりなり。故に、《蟲の木食むに、たまたま字にて現れたりとは云へども、その是(字) (蟲) 非字(を)、知らざるが如し。》これもまたまた、爾なり。……そもそも、隔ても無く、異

ならざりける佛性眞如、如何がさとり知るべきと言うに、觀行相似、(の)位を経て、内には十法成乘觀智を凝らして、ほかには万行諸波羅蜜の修行をな「」(一) 經典讀誦し、佛法を解説す。

『見性成佛論』の問答における答者は、円教では段階（六即）を作り、万行諸波羅蜜の修行をなし、知識や經卷に従い佛法をさとらせることを詳細に説明しつつ、それらの修行論に強く反論している。おそらく、この答者は天台教学にかなり通じた人が述べたことが推測され、それは大日房能忍であつたかもしれない。<sup>29</sup> そのことから照らし合わせても、『見性成佛論』が大日房能忍による問答集であることの可能性は高いと言える。『聖光上人伝』には、聖光上人が大日房能忍に難問（宗門意、宗鏡録之三章、天台宗之三諦、達磨宗之五宗等）を尋ねたが、大日房は口を閉ざして答えなかつたことが記されている。<sup>30</sup> 『見性成佛論』の答者が大日房能忍だとすれば、能忍は天台、禪の知識は深く、それらの思想内容に精通していたはずである。にもかかわらず、口を閉ざして答えなかつた様子は、『見性成佛論』の終盤における問答の中で、説くことを止めてしまう態度と極めてよく似ている。さて、学問仏教に対する批判は禪の語録にも頻繁に述べられている。例えば、

『血脈論』には、

「若不見性。説得十二部經教。盡是魔説。魔家眷屬。不是佛家弟子。」（大正藏四八、三七四上）（若し見性せずんば、十二部經の教を説得も、尽く是れ魔説なり。魔家の眷屬は是れ佛家弟子にあらず。）

と学問仏教に対し極めて手厳しい。また、『証道歌』には、

「吾早年來積學問。亦曾討疏尋經論。分別名相不知休。入海算沙徒自困。」（大正藏四八、三九六下）（吾れ早年よりこのかた学問を積み、亦た曾て疏を討ね經論を尋ねて、名相を分別して、休むことを知らず。海に入り沙を算えて徒らに自ら困す。）

と自己の経験から学問仏教の無意味さを語っている。さらに、『頓悟要門』には、

「唯直下頓了自心本來是仏、無一法可得無一行可修。……學道人若欲得成佛。一切佛法總不用學。」（大正藏四八、三八一上）

(唯だ直下に自心本来はれ仏なりと頓に了すれば、一法として得べきもの無く、一行として修むべき無し。……学道の人、若し成佛することを得んと欲せば、一切の佛法、總べて学ぶことを用いざれ。)とあり、いずれも禅宗において学問仏教が無用であるかを明確に主張している。

第三は律師に対する批判である。律師については、以下のように述べられている。

「律師持律、自縛<sup>レ</sup>ミ。亦、能縛<sup>ル</sup>他。外作<sup>ハ</sup>威儀<sup>ニ</sup>恬<sup>シ</sup>靜。」(一八三頁上)

何にも縛られず、自分自身の心を解放することによってさとりは得られると信じている禅宗にとつて形式に当てはめる律師の立場は、批判の対象となるであろう。栄西は『興禪護國論』のなかで、戒律を守らず修行をしない達磨宗に対し「不可与此人共語同座、応避百由旬矣」(此の人と共に語り同座すべからず。応に避くべきこと百由旬なり。)と手厳しく非難している<sup>32)</sup>。この点は栄西自身もともと禅僧ではなく台密の専門家であり、戒律を重視していた<sup>33)</sup>ことを考慮すれば、当然戒律を批判する禅宗(中国唐代南宗禅)を敵視したことは首肯できる。

しかし、同時に、栄西の達磨宗に関する記述には『見性成佛論』で説かれている内容と非常に近い一面があると考えられる。例えば、『興禪護國論』の「本無煩惱、元是菩提。」(本より煩惱無く、元より是れ菩提<sup>34)</sup>)は『見性成佛論』の最初の問答のなかで次のとおり、『宗鏡録』からの引用文を使って答えている。

「文殊我不<sup>レ</sup>求<sup>ル</sup>菩提<sup>ニ</sup>何<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>故<sup>ニ</sup>。菩提、即我<sup>ニ</sup>。我、即菩提ナリト、ノタマヘリ。」(一七七頁上)

また、『興禪護國論』の「是故不用事戒、不用事行」(是の故、戒を用いる事せず、行を用いる事せず<sup>35)</sup>)については上述したように、『見性成佛論』が「見性」の思想が根底にあり、中国唐代南宗禅の伝統を基礎にしているの当



然のことと言える。但し、『興禪護國論』の「只応用偃臥。」（只だ応に偃臥を用いるべし。）<sup>36</sup>に当たたる表現は『見性成佛論』の中から見つけることは出来ない。むしろ、「見性成佛」するために、「二見」を持った見方を改めるように促したり、文字や他人に従ってさとりを得るのではなく、自ら己の心を見つめて自分自身でさとることを繰り返して述べている。『見性成佛論』で五回引用している大珠慧海のその著『頓悟要門』で「努力。努力。衆生自度。佛不能度」（努力せよ、努力せよ。衆生自ら度す、佛度すこと能ず。）<sup>37</sup>と述べている。中国唐代南宗禪の修行（さとりの努力）と律師の榮西が規定する修行とは全く質の異なるものであったことは明らかである。

第四は念仏に関する批判である。『興禪護國論』には、「何勞修念仏、供舍利、長齋節食耶云々。答曰。其無惡不造之類也。」（何ぞ念仏を修し、舍利を供し、長齋節食することを勞せん耶と云々。答えて曰く……）と書かれ、「念仏が不用」という達磨宗の思想が示されている。この点も『見性成佛論』の中で、ちなみに念仏宗に対し以下のように批判的に説かれている。

「信、仰、佛ナルヘシトハイエトモ、マサシキサトリヲハエサルナリ。シカレハ、穢土イトヒ、浄土ネカヘルハ、コレ、仰信ハカリナリ。イツカハマサシクコ、ロニアタリテ、浄土ウマルヘキヨシヲシリタル。タ、念佛スレハ、ムマルヘシト、ヒ、ヲモヘルハカリナリ。コレスナハチ、ソノヒトノ名キ、テ、信仰イヘト、ソノヒ□ノ面、マサシクミサルカコトシ。禪宗シカラス。ソノ人名キ、タ、チニソノヒトノ面ミテ信コトシ。名キクト、コ、ロハイツレモカハラサレト、面ミルトミサルトハ、ハルカニカハレルコトナリ。」（二八八頁上―下）

念仏批判は、『血脈論』に二箇所ある。

一、「若見本性。不用讀經念佛。」（大正藏四八、三七五中）（若し本性見ば、読経念佛を用いず。）

二、「終日區區念佛轉經。昏於神性。不免輪迴。」（大正藏四八、三七五中—下）（終日區區と念佛し転經するも、神性に昏れば輪迴を免れず。）

また、大珠慧海の語録（『頓悟要門』）の中に次のようにある。

「有法師問。念佛是有相大乘。禪師意如何。師曰。無相猶非大乘。何況有相。」（大正藏五一、四四三下）（法師有り、問う。「念佛はれ有相大乘なりと。禪師の意如何。」師曰く。「無相猶お大乘に非ず。何ぞ況んや有相をや。」）

以上、三藏教（小乗宗）、円教、律師、念仏の批判を通して、『見性成佛論』の思想の一面を明らかにした。また、同様の批判が『血脉論』、『証道歌』、『頓悟要門』などにも散見され、『見性成佛論』が馬祖系や牛頭系の思想の影響を受けていることが明らかになった。

## 結論

『見性成佛論』の思想を「引用文」と「禪宗以外の仏教に対する批判」の二視点から考察を試みた。その結果、『見性成佛論』は『景德伝燈録』から禪語録を多く引用し、引用文の典拠から中国唐代南宗禪の馬祖系や牛頭系の思想の影響を強く受けるものであることが判明した。また、三藏教（小乗宗）、円教、律師、念仏を批判し、禪宗の正当性を論じていることが判った。さらに、それらの批判も馬祖系や牛頭系の禪語録と共通していることが理解できた。

また、栄西が『興禅護國論』で記述している達磨宗の戒律、修行、念仏に対する考え方が『見性成佛論』のそれと一面において通じるところがある。さらに、『聖光上人伝』に記述されている大日房能忍の問答の様子は、『見性成佛論』の終盤のそれと相い似ていることが解った。従って、『見性成佛論』の答者は大日房能忍である可

能性がある。また、栄西が「不可与此人共語同座、応避百由旬矣」（此の人と共に語り同座すべからず。応に避くべきこと百由旬なり）<sup>(39)</sup>としたその人物こそ大日房能忍と推定される。そうであるならば、栄西と同時代に活躍した大日房能忍の没年は、栄西のそれ（一二二五年）と多く見積もっても数十年の差異であろう。『見性成佛論』の最後に記されていた、永仁五年（一二九七年）八月四日は、栄西の没年より八十二年も後であり、大日房能忍が『見性成佛論』の中で実際問答をした年月とは到底考えられない。おそらく後の弟子が嘗て書き留めてあったノートのようなものを八十年余り後に纏めたと推測される。

さて、ここで、今まで達磨宗について述べてこられなかった点を挙げてみたい。

第一に、『見性成佛論』では禪宗（「心宗」または「佛心宗」）とそれ以外の仏教との違いを明らかにしているが、従来言われてきた『宗鏡録』の他に、唐代の禪語録等を愛読していたであろう様子がわかった。また、同時に、天台の教えにも精通していることがその説明や批判に如実に顕れていることが理解できた。

第二に、『見性成佛論』は「見性」することが禪のさとりであり、諸相を手がかりとしてさとりを求めることなど、全く認めていないのである。「自性<sub>シ</sub>真佛<sub>ヲ</sub>モチテ佛<sub>ト</sub>セヨ」（一八三頁下）、「諸法相ハナレテサトリヲタツネサレ」（一八四頁上）、「他人シタカヒテモトメケルコト、アハレナリ」（一九八頁上）と説法している人が、二人の弟子を入宋させ印可を貰いに行くなど、極めて不思議な行爲と思える。筆者は「達磨宗」と呼ばれる集団（三宝寺系、多武峰系、波着寺系に分流<sup>(41)</sup>）のいずれかが、大日房能忍の晩年あるいは没後、祖師の意思とは別な方向へ進んでいった結果ではないかと考えている。おそらく、当時の宋代禪に勢力を奪われる形になるのであろうが、祖師相伝も途絶え、祖師の名前を残すことも、語ることも禁じ、祖師の思想を否定し、生き残れる仏教形態に変えていったのではないだろうか。大日房能忍は一部の弟子達によってその思想が抹殺されたのかもしれない。結論的に『見性成佛論』は漠然と「達磨宗の資料」というよりも、「大日房能忍自身の思想に関わる資料」と見なし得るで

あろう。

第三に、『成等正覺論』との関係であるが、『成等正覺論』と『見性成佛論』が『宗鏡録』、『景德伝燈録』の引用文を用いている点は共通である。但し、『成等正覺論』が大部分を『宗鏡録』からの引用文で構成しているの  
に比べ、『見性成佛論』は『景德伝燈録』からの引用文がより多い。また、『成等正覺論』中、「如祖師云。一切由  
心、邪正在己。不思一物、即是本心。智者能知、更無別行。」（一切は心に由る、邪正は己に在り。一物を思わざる、即ち是れ  
本心なり。智者は能く知り、更に別行無し。）の文言は、『見性成佛論』の「菩提ネカハムヨリワ、煩惱菩提ハ一心サトラムコ  
トヲネカウヘシ。モシ、カラハ、煩惱ハナレテ菩提イタリナム。」（二七七頁下）は同様の考え方である。『見性成佛論』  
と『成等正覺論』の成立年代については、大日房能忍の没後の達磨宗の宗教復興運動の側面を考慮すれば、軽々  
に結論は出せないが、『成等正覺論』が祖師か開祖の忌日に説かれたこと<sup>42</sup>に対し、『見性成佛論』は恐らく大日房  
能忍が答者として自論を説いている問答集なので、内容的には『見性成佛論』のほうが早く成立したと考えても  
良いのではないか。

大日房能忍と達磨宗についてさらに解明するために、別の機会を得て発表できることを願っている。

（了）

## 註

- （1）名古屋大学グローバルCOEプログラム「テキスト布置の解釈学的研究と教育」第四回国際研究集会、ブレ・カンフ  
アレンス真福寺大須文庫聖教展観―中世宗教テキストの世界―、二〇〇八年七月一八日
- （2）鷲尾順敬「大日房能忍の達磨宗の首唱及び道元門下の関係」『日本及日本人』第三三八号、一九三七年七月

『見性成佛論』の基本的性格に関する一考察（古瀬）

一六

- (3) 大久保道舟「道元禪師の原始僧団と日本達磨宗との関係」（『道元禪師研究』道元禪師鑽仰会、一九四一年）『道元思想体系、三、伝記篇第三卷』に再録。同朋舎、一九九五年七月）
- (4) 嗣永芳照「日本曹洞宗に於ける大日房能忍の達磨宗の消長―徹通義介をめぐる―」（『書陵部紀要』一八号、一九六六年一月）
- (5) 高橋秀栄「大日房能忍と達磨宗に関する史料(1)」（『金沢文庫研究』二二―四、一九七六年六月）及び「大日房能忍と達磨宗に関する史料(二)」（『金沢文庫研究』二二―七、一九七七年一月）
- (6) 同「三宝寺の達磨宗門徒と六祖普賢舍利」（『宗学研究』二六、一九八四年三月）
- (7) 中尾良信「撰津三宝寺関係資料」（『曹洞宗研究員研究生研究紀要』一八、一九八六年一月）
- (8) 石井修道「仏照徳光と日本達磨宗」上（『金沢文庫研究』二〇―二一、一九七四年二月）、「仏照徳光と日本達磨宗」上（『金沢文庫研究』二〇―二二、一九七四年二月）。『道元禪の成立史研究』第九章「道元の日本達磨宗批判」、第一節「戒等正覚論」と日本達磨宗」（大蔵出版、一九九一年八月）に加筆し再録。筆者の引用は再録による。
- (9) 『金沢文庫資料全書 仏典第一巻禪籍篇』（神奈川県立金沢文庫編、翻刻、金沢文庫主任学芸員納富常天、高橋秀栄、一九七四年三月）
- (10) 石井修道「多くが『宗鏡録』からの引用によつて構成されたことがわかつた。」（註（8）再録、六六〇頁）
- (11) 中尾良信「大日房能忍の禪」（『宗学研究』二六、一九八二年三月、二三〇頁）、『日本禪宗の伝説と歴史』（歴史文化ライブラリー一八九、吉川弘文館、二〇〇五年五月、九七―九八頁）
- (12) ①「宗鏡録」五陰即菩提 離是無菩提 不可以菩提而求菩提 不可以菩提而得菩提 何以故 菩提即我 我即菩提ナリトノタマヘリ」（註（9）、一七七頁上）。「五陰即菩提。離は無菩提。不可以菩提而求菩提。不可以菩提而得菩提。何以故。菩提即我。我即菩提故。」（大正藏四八、五三八上）

②「宗鏡三論法相華嚴等宗染對治教イヘリ」(註(9)、一八三頁上)。典拠不明。

③「宗鏡云東國ノ元曉義相ニ法師同來唐國ニ尋師遇夜ニ宿意止於場内ニ元曉法師因渴思漿一見一泓水ヲ攬飲甚美及至天明一觀是尸之汁心惡吐」然大悟乃曰我聞佛言三界唯心万諸唯識故美惡在實非水乎トイヘリ」(註(9)、一八九頁上)。「如昔有東國元曉法師。義相法師。二人同來唐國尋師。遇夜宿荒。止於家内。其元

曉法師。因渴思漿。遂於坐側。見一泓水。掬飲甚美。及至來日觀見。元是死屍之汁。當時心惡。吐之。豁然大悟。乃曰。我聞佛言。三界唯心。萬法唯識。故知美惡在我。實非水乎。」(大正藏四八、四七七上)

④「宗鏡云勇施菩薩因犯三姪欲尚悟无生性比丘尼无一心脩行亦證道果何況信解佛法諦了自心而自然万境如幻何者以一切法皆從心生心既无形法何有相之」(註(9)、一九三頁下)。「勇施菩薩因犯姪欲。尚悟無生。性比丘尼。無心修行。亦證道果。何況信解一乘之法。諦了自心。而無剋證乎。或有疑云。豈不顯煩惱耶。解云。但諦觀殺盜姪妄。從一心上起。當處便寂。何須更斷。是以但了一心。自然萬境如幻。何者。以一切法皆從心生。心既無形。法何有相。」(大正藏四八、五一一下)

(13) ①「於名字中通達解了知一切法皆是佛法釋ナリ」(註(9)、一八二頁上)。「於名字中通達解了。知一切法皆是佛法。」(大正藏四八、六三二下)

②「靈光獨照。物累カ、エラレス魏々堂々等妙域コハ靈了ミシテ凡聖表イテタリ金剛堅固躰八臂魔王動長生不死心ニ死殺鬼クラハレス无形无相大毗盧不老不小大丈夫諸佛一口ノミクライ方法一時トリヒサクナムソカナラス身長丈六紫磨金輝遍知縛伽イヒ項佩圓光廣長舌相如來世尊イハム凡諸有相皆是虛妄ノヘタリ自性真佛モチテ佛セヨ以色見我見行邪道トケリ」(註(9)、一八三頁下)。「靈光獨照。物類不拘。巍巍堂堂。三界獨步。何必身長丈六紫磨金輝。項佩圓光。舌相長廣。若以色見我。是人行邪道。」(大正藏四八、九四三上)

『見性成佛論』の基本的性格に関する一考察(古瀬)

『見性成佛論』の基本的性格に関する一考察（古瀬）

一六

(14) 「語性論ゴセイロンイハク罪業ツミノトウタカイノコ、ロヨリコレリト釋シヤクセリ」(註(9)、一九〇頁下)。「疑即成罪。何以故。罪因疑惑而生。」(大正藏四八、三七二下)

(15) 註(1)で公表された資料には『伝心法要』と『苑陵録』が発見されている。

(16) ①「青ミタル翠竹コトくくコレ法身樹對ホウジンジュタイミタル黄花ミナコレ般若シカレ」(註(9)、一八一頁下)。「青青翠竹盡是法身鬱鬱黃華無非般若。」(大正藏五一、四四一中)

②「恵海和尚シヤクノク云心是佛ココロニハミツ不用將佛テハナラズ求ム佛ミツ心是法ココロニハミツ不用將法テハナラズ求ム法ミツ云イハレ」(註(9)、一八四頁上—下)。「師曰。心是佛不用將佛求佛。心是法不用將法求法。」(大正藏五一、四四一上)

③「タトヘハ鸚鵡アウム人コトハラハマナヘトモ人コ、ロシラサルカコトシ」(註(9)、一八四頁下)。「師曰。如鸚鵡學人語話自語不得」(大正藏五一、四四二下)

④「恵海禪師ノ云頓悟トクゴ上乘ジョウ超凡ジョウ超コウ聖マムル迷メ心性ココロ人論凡ヒトノ論聖ロン」(註(9)、一九三頁下)。「頓悟上乘超凡越聖。迷人論凡論聖。」(大正藏五一、四四二下)

⑤「於チハ迷人ニ求得ム求證ム若於シテハ悟人ニ無得シ無求シ若於シテハ迷者ニ期久遠劫キウエンキョク若於シテハ悟者ニ頓見トクミ本佛ニイヘリ」(註(9)、一九三頁下)。「迷人求得求證。悟人無得無求。迷人期遠劫。悟人頓見。」(大正藏五一、四四二下)

(17) ①「梁リヤウ寶志ホウシ云眞俗シンソク二ニ日ニ日ニ法師說法極ホフシヤク好心中コウニ不レ離レ煩惱ボウノウ口談文字クタンモンジ化カ他タ轉テ更マシ增ゾウ他タ生シヤウ死シ雖然シヤウゼン口談クタン甘露カンロ心裏ココロ尋シユ常ジョウ口ク已イ元ゲン無レ一ニ錢ニ日夜ニ數ス他タ珍寶チンポウ」(註(9)、一八三頁上)。「法師說法極好。心中不離煩惱。口談文字化他。轉更增他生老……雖然口談甘露。心裏尋常口已元無一錢。日夜數他珍寶。」(大正藏五一、四五一中)

②「寶誌ホウシ台タイ云衆生シュウジヤウ與佛ニ無殊ムシユ大智ダイチ不レ異レ二ニ於愚ニ何用ニ向外ニ求ム寶ホウ身田シントウ自ジ有リ明珠ミンジュ」(註(9)、一八四頁下)。「志公和尚生佛不二科云。眾生與佛不殊。大智不異於愚。何用外求珍寶。身內自有明珠。」(大正藏四八、四九二上)

③ 「又云佛衆生二種。衆生即是世尊。凡夫妄生。分別无中執有迷。奔。」(註(9)、一八四頁下)。「佛與衆生二種。衆生即是世尊。凡夫妄生分別。無中執有迷奔。」(大正藏五一、四五〇下—四五二上)

④ 「律師持律自縛。亦能縛他。外作威儀。恬靜心口恰。洪波有二比丘犯律。便却往問優婆依律說罪。罪增比丘網羅。方丈室中居士維摩便。即來可優婆點然。无二對淨名說法。无過。」(註(9)、一八三頁上)。「律師持律自縛。自縛亦能縛他。外作威儀恬靜。心內恰似洪波。……有二比丘犯律。便却往問優波。優波依律說罪。轉增比丘網羅。方丈室中居士。維摩便即來詞。優波默然無對。淨名說法無過。」(大正藏五一、四五二中)

⑤ 「正邪道不二了悟凡聖同迷。悟本无別生死涅槃。一イヘルコトマコトナルカナヤ。」(註(9)、一九四頁下)。「正道邪道不二。了知凡聖同途。迷悟本無差別。涅槃生死一如。」(大正藏五一、四五〇下)

① 「眞覺大師法身覺了。无一物本源自性天真佛。五陰浮雲空。去來三毒水泡虛。」(註(9)、一七九頁上)。「法身覺了无一物。本源自性天真佛。五陰浮雲空去來。三毒水泡虛出沒。」(大正藏四八、三九五下)

② 「波羅螢光イヨクツミヲ増維摩大土コトクツミヲソキタマヒキ。」(註(9)、一八八頁下—一八九頁上)。「波羅螢光増罪結。維摩大土頓除疑。」(大正藏四八、三九六下)

③ 「眞覺大師云證實相。无法若刹那滅却。阿鼻業若將妄語誑衆生。自招拔舌塵劫。」(註(9)、一八九頁上)。「證實相無人法。刹那滅却阿鼻業。若將妄語誑衆生。自招拔舌塵劫。」(大正藏四八、三九五下)

④ 「龍牙和尚云。在夢那知夢是虛覺。覺來方覺夢中无迷時。恰是夢中事。悟後還同睡起人イヘリ。」(註(9)、一九二頁下)。「在夢那知夢是虛。覺來方覺夢中無。迷時恰是夢中事。悟後還同睡起夫。」(大正藏五一、四五三上)

⑤ 「忠國師云。迷人向文字中求。悟人向心而覺。迷迷人脩因待果。果悟人了心而无相。イヘリ。」(註(9)、一九三頁上)。「迷人向文字中求。悟人向心而覺。迷迷人脩因待果。悟人了心无相。」(大正藏五一、四四二下)

⑥ 「雲居和尚云。一道虛寂。万物齊平。何貴何賤。何辱何榮。アラムト。」(註(9)、一九四頁上)。「雲居和尚云。一道虛寂。万物齊平。何貴何賤。何辱何榮。アラムト。」(註(9)、一九四頁上)。「雲居和尚云。一道虛寂。万物齊平。何貴何賤。何辱何榮。アラムト。」(註(9)、一九四頁上)

『見性成佛論』の基本的性格に関する一考察(古瀬)



居和尚云へり」とあるが、引用文から推定するに、『景德伝燈録』三十卷には「僧亡名息心銘」となっている。「二道虚寂萬物齊平。何貴何賤何辱何榮」（大正藏五一、四五八中）

- (22) 「狂クワイヤゴロ 狗コツツクレヲカフリ師子シヒト ヲ、ヒ」（註（9）、一八四頁上）。「又問曰。夫經律論是佛語。讀誦依教奉行。何故不見性。如狂狗趁塊師子敵人」（大正藏五一、二四七中）

- (23) 「サトリニ速チツクアルコトハ教漸ニゼムシ頓トシアルカユエナリソヘニ漸教ナラエルトキニハ僧キ祇劫數ヘテナヲ輪廻サトニト、マリ頓乘サトル日ヒチヲ屈伸 アイタニ妙覺ミヤコニイタルナリ」（註（9）、一九三頁下）。「覺有淺深教有頓漸。其漸也歷僧祇劫猶處輪迴。其頓也屈伸臂頃便登妙覺。」（大正藏五一、四三九中）

- (24) 「眼マナコ若不レ睡ハネ 諸夢レ自レ除キヌ 心不レ異ハ 方法ニ一如ニイヘルコトマコトナル」（註（9）、一七九頁上）。「眼若不睡諸夢自除。心若不異萬法一如。」（大正藏五一、四五七中）

- (25) 「四シ祖ソ日ニ一切業障ハ本來空寂ニ 一切因果ハ皆如ク幻夢ノ 蕩ニ無礙ニ 任ニ意ニ縱ニ橫ニ 不レ作レ諸善ニ 不レ作レ諸惡ニ コ、二法融問日ニ既不レ許レ 不レ觀行ニ於レ境起ニ 時ニ心如ク對活ニ 祖答ク 日境緣ニ无好醜ニ 起レ於心ニ 若不レ強ニ 名ニ妄情ニ從レ何ニ起レ妄情ニ既不起レ 真心ニ任遍知ニイヘリ、（註（9）、一八九頁下—一九〇頁上）。「一切煩惱業障本來空寂。一切因果皆如夢幻。……蕩蕩無礙任意縱橫。不レ作レ諸善不レ作レ諸惡。……境界無好醜。好醜起於心。心若不強名。妄情從何起。妄情既不起。真心任遍知。」（大正藏五一、二二七—上—中）

- (26) 「傳シ大士ニ云ハ 此コノ門端坐成佛ニイヘリ」（註（9）、一八七頁下）。「入此法門端坐成佛。」（大正藏五一、四五六下）

- (27) 「宗蜜シ禪師ハ教ハコレ佛ニラムコトハナリコレ佛ニラムコトハナリ禪ハコレ佛ニラムコ、ロナリトノタマヘリ」（註（9）、一八一頁上）。「典拠不明。」

- (28) 「弘法シ大師ハ以テ西天佛心ニ印ス東土佛心ニ曹谿シ玄ハ旨ニ宗ハ屬ニ在レ應機者イヘリ」（註（9）、一八一頁上）。「當聞弘法勸元師元當以テ西天佛心ニ印ス東土佛心ニ曹谿シ玄ハ旨ニ宗ハ屬ニ在レ應機者イヘリ」（註（9）、一八一頁上）。「大通禪師語錄」、大正藏八一、八三（中）大通愚中（一七三七）により引用されているが典

拠は不明。「弘法大師」は日本の空海を指すかは不明。

(29) その名「大日房」から天台僧であったことが知られている。今枝愛真「禅僧房号考」(『禅文化』六三号、一九七二年)、五九頁。

(30) 「禪師閉口結舌、不答」(『続群書類従』第九号、三三二頁)

(31) 問答三三—四四(一九七頁上—一九八頁上)

(32) 「或人妄称禅宗、名曰達磨宗。而自云、無行無修、本無煩惱、元是菩提。是故不用事戒、不用事行、只応用偃臥。何勞修念仏、供舍利、長齋節食耶云々。是義如何。答曰。其無惡不造之類也。如聖教中言空見者、是也。不可与此人共語同座、応避自由句矣」(大正藏八〇、七下—八上)

(或る人妄りに禅宗と称し名づけて達磨宗と曰う。しかも自ら云く「行無く修無く、本より煩惱無く、元より是れ菩提。是れ故、戒を用いる事せず、行を用いる事せず、只だ応に偃臥を用いるべし。何ぞ念仏を修し、舍利を供し、長齋節食することを勞せん耶と云々。」是の義如何。答えて曰く「其れ之の類を造らざること悪無し也。聖教中に空見と云う如きは、是れ也。」此の人と共に語り同座すべからず。応に避くべきこと自由句なり。)

(33) 中尾良信『日本禅宗の伝説と歴史』吉川弘文館、六六頁。

(34) 註(32) 参照。

(35) 註(32) 参照。

(36) 註(32) 参照。

(37) 大正藏六二、一三三上。

(38) 註(32) 参照。

(39) 註(32) 参照。

『見性成佛論』の基本的性格に関する一考察(古瀬)

『見性成佛論』の基本的性格に関する一考察（古瀬）

一七三

(40) 『聖光上人伝』、「磬山紹瑾嗣書之助証」（『磬山禅師御遺墨集』）、『元亨釈書』卷二、「榮西伝」、『本朝高僧伝』卷一九、「能忍伝」。

(41) 高橋秀榮「達磨宗と道元」（『道元思想のあゆみⅠ』）、一二三頁。

(42) 石井修道、註（8）再録、七一九頁。

(43) 石井修道、註（8）再録、六六二頁。

## Summary

### *The Treatise on Seeing One's Nature and Attaining Buddhahood* 見性成佛論: An Analysis of Its Basic Doctrinal Stance

Tamami Furuse

In my recently completed MA thesis, dedicated to the study and annotated translation of *The Treatise on Seeing One's Nature and Attaining Buddhahood* (見性成佛論 *Kenshō jōbutsu ron*), I show that the text is most likely related to the corpus attributed to or associated with Dainichibō Nōnin 大日房能忍. My thesis also contains a detailed examination of the basic ideas of the text, examination actually undertaken for the first time.

In the present paper, I tackle its doctrinal stance from two different angles: (1) the sources cited or referred to in the text; and (2) the criticism of Buddhist schools and interpretations different from the Zen tradition. This analysis sheds more light upon the basic philosophical position of *The Treatise on Seeing One's Nature and Attaining Buddhahood* and points even more convincingly to the possibility that the work is closely related to Nōnin. It is hoped that this will lead to a better understanding of Nōnin, the man and his thought. The paper also presents my conjectures concerning the dating of this text.

*Postgraduate Student,  
International College  
for Postgraduate Buddhist Studies*